

- [成果情報名] イチゴのヒラズハナアザミウマに最も有効な天敵製剤はククメリスカブリダニ
- [要 約] ククメリスカブリダニは他の天敵製剤と比較し、イチゴのヒラズハナアザミウマ密度抑制効果に優れ、被害果抑制効果も高い。
- [キーワード] イチゴ、アザミウマ類、天敵、生物的防除法
- [担 当] 静岡農林技研・植物保護・環境保全科
- [連絡先] 電話 0538-36-1556、電子メール agrihogo@pref. shizuoka. lg. jp
- [区 分] 生産環境（病虫害）
- [分 類] 技術・普及
-

[背景・ねらい]

イチゴ栽培ではヒラズハナアザミウマを主とするアザミウマ類による果実被害が全国的な問題となっている。特に、本県育成品種「きらび香」を用いた超促成栽培では暖候期の果実品質の維持が可能であることから、栽培の長期化によりアザミウマ類の被害がより激化することが予想される。そこで、各種市販天敵製剤のヒラズハナアザミウマに対する密度抑制効果および被害果抑制効果を評価し、最も有効な天敵製剤を選定した。

[成果の内容・特徴]

- イチゴのアザミウマ類に使用可能な市販の天敵製剤のうち、ククメリスカブリダニ（350,000頭/10a：登録下限量）を4月上旬から1ヶ月間隔で3回放飼すると、スワルスキーカブリダニ（50,000頭/10a：登録上限量）、アカメガシワクダアザミウマ（15,000頭/10a：登録上限量）の3回放飼と比較してヒラズハナアザミウマ成虫および幼虫密度、被害果率が最も低く推移し（図1a～c）、累計被害果率も最も低くなる（図1d）。
- ククメリスカブリダニの1回あたり放飼密度を高めることで、さらに害虫密度抑制効果および被害果抑制効果が高まる（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

- ククメリスカブリダニを使用しても5月下旬以降は被害果率が上昇する傾向にあるため、この時期以降は必要に応じて殺虫剤による防除に切り替える。この時期は栽培終期に当たるため、天敵に影響する殺虫剤も選択肢に含めることができる。
- ククメリスカブリダニを含むこれらの天敵製剤はアザミウマ類の成虫を捕食しないため、防虫ネットの展張や粘着トラップの設置などのアザミウマ類成虫に対する防除対策を併用することで効果が高まる。
- 農薬散布する場合は天敵に対する影響に注意する。
- ククメリスカブリダニ製剤の価格は登録下限量（350,000頭/10a）で約41,500円/10a、登録上限量（700,000頭/10a）で約83,000円/10aである（※野菜類（施設栽培）のアザミウマ類に対する登録上の使用量50～100頭/株をもとにイチゴの栽植密度を7,000株/10aとして算出）。スワルスキーカブリダニ（50,000頭/10a：登録上限量）は約32,000円/10a、アカメガシワクダアザミウマ（15,000頭/10a：登録上限量）は約39,500円/10aである（価格は令和7年7月時点）。
- ククメリスカブリダニの効果が優れる要因として、他の天敵製剤と比較して1回あたりの放飼密度が高く、天敵の定着性および防除効果の即効性に優れることが考えられる。

[具体的データ]

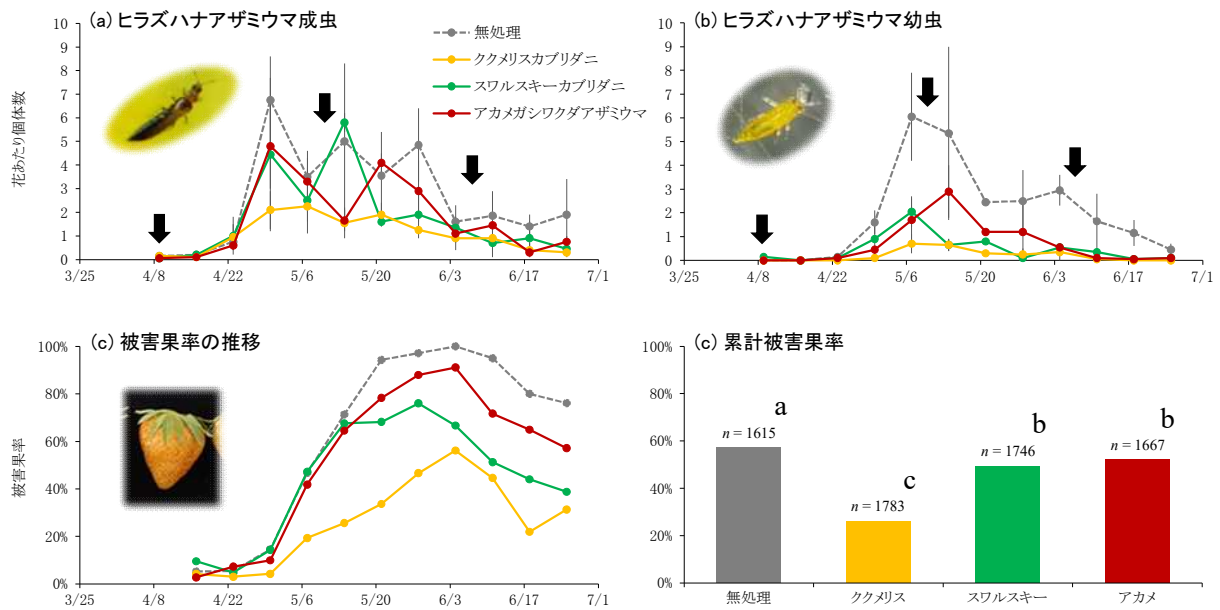


図 1 各天敵製剤のヒラズハナアザミウマ密度抑制効果および被害果抑制効果

- 1) 試験開始前にヒラズハナアザミウマ成虫を全区に放飼した。
- 2) ヒラズハナアザミウマ成虫および幼虫のエラーバーは SE を示す。
- 3) 矢印は天敵放飼時期を示す。
- 4) 累計被害果率の「n」は総収穫果実数を示す。異なるアルファベット間に有意差があることを示す (χ^2 検定、 $P < 0.05$)。
- 5) 収穫果実を目視し、わずかでもアザミウマ類による被害が認められる果実を被害果として分類したため、生産現場において認識される被害果率よりも高い値を示している可能性がある。

[その他]

研究課題名：首都圏へ供給拡大!!イチゴ生産を革新する「超促成」「超多収」「高収益」システムの開発

予算区分：県単（新成長）

研究期間：2021～2023 年度

研究担当者：中野亮平、斉藤千温、服部里菜、土井 誠、吉崎涼花

発表論文：中野亮平ら（2025）促成栽培イチゴにおける春季以降のヒラズハナアザミウマに対する 4 種天敵製剤の防除効果. 関西病虫害研究会報 67: 37-46